

## 難波西鶴と

## 海の道

[44]

森田 雅也

前回に示したように、西鶴の『日本永代蔵』(元禄元(1688)年刊)巻四の「心を疊込む古筆(筆)屏風」には、西鶴自身としか思えない視点から海洋交易の利点が説かれて

います。中国人相手の投資は大胆でなくてはならぬ。中国人に約束を違えるような商人はいないというのです。それに対して、約束破りは何と日本の商人だと指

摘するのです。

「只ひずらひきは日

本、次第に針をみちかく摺り、織布の幅をぢぢめ、傘にも油をひかず、銭安きを本として、売り渡すと跡をかまはず。身にかからぬ大雨に、親でもはだしになし、只は通せんす。」

日本の商人は、針を商っては、少し短くして売り、織り布の幅は少し細くし、傘の紙には保護用の油を節約し、何でも値段が安いことをよいこととして

この「安からう、悪からう」の悪徳商法は、戦後の日本にもあって耳が痛いですね。でも、最近では日本よりも、何しろモラルの悪い商人は困ります。そんな商人は、売ってもうけてしまえば反省もしません。自分さえぬれなければ、大雨でも親には

だして歩かせるといふ、非道な強欲ぶりだといふのです。さらに例として、日本と朝鮮との交易の事例をあげます。

「むかし、対馬行き

## モラルなかったのは日本商人？

の煙草として、ちひやき箱入りにしてかぎりもなく時花り、大坂にてその職人に刻ませけるに、当分知れぬ事として、下づみ手抜きして、しかも水にしたし遣はしけるに、舟わたりのうちにかたまり、煙の種とはならずりき」

昔、対馬行き煙草といつて、小さい箱入りにしたものが大衆人気を博したことがありました。加工は大坂の煙草刻み職人に任せていたのでしょうが、仲介する業者が手を抜かせたのでしょうか、当分はわからないだろうと下積みの煙草はいいかげんな処理でした。その上、管理が悪く、

雨水に晒して湿ってしまい、煙がつかないほどの劣悪な煙草なのに、だまして売ったと

いひます。「唐人これをかく恨み、その次の年、なほ又過ぎつる年の十倍もあつらへければ、欲に目のあかぬ人、我おそしと取急ぎ下しけるに、大分湊に積ませ置きて、『去年煙草は、水にしめされ思はしからず。当年は、湯か塩につけて見給へど、皆皆つき返され、自らに朽ちて、礫の土とはなりぬ』

唐人(ここでは朝鮮人)も負けず、翌年に昨年の10倍の取引で煙草を賣うとし、欲の塊の日本商人が次々と搬入してゐると、わざと購入せず、煙草を腐らせてしまったといふのです。

お見事な朝鮮商人の敵討ちですね。(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 海洋交易の利点説く